

大学新入生の友人関係の変化と適応感との関連

－短期縦断調査より－

渡 邊 賢 二 (皇學館大学教育学部)

堤 貴 之 (志摩市立磯部小学校)

〈要旨〉 本研究は、大学新入生が友人関係を形成・維持する行動尺度を作成し、その尺度の妥当性を検討した。また友人関係の変化（4月と7月）と適応感との関連を検討した。尺度を作成するために、大学生19名から自由記述で回答を得た。KJ法で分析した結果、26項目を得ることができた。大学新入生567名を対象に質問紙調査を行い、因子分析した結果、「友人関係形成」8項目、「友人関係維持」7項目、「友人関係親密維持」5項目から構成される友人関係を形成・維持する行動尺度が作成され、妥当性も明らかにされた。また、友人関係を形成・維持する行動の変化については、「友人関係維持」がTime1よりTime2の得点の方が有意に高かった。さらに、友人関係を形成・維持する行動の変化が大学生生活の適応感の変化に及ぼす影響を検討した結果、「友人関係形成」の変化については、「大学生生活に関する満足感」、「大学生生活に関する抑うつ感」、「学習に対する適応感」、「自尊感情」の変化に、「友人関係維持」と「友人関係親密維持」の変化については、「大学生生活に関する満足感」、「対人関係の満足感」の変化に対する正の標準偏回帰係数が有意であった。

〈キーワード〉 友人関係、変化、大学新入生、適応感、縦断調査

【問題と目的】

近年、教育現場では小1プロブレム、中1ギャップ、高1クライシスと言われているように、学校移行に関する問題が社会的に注目されている。大学生においても、新しい環境に移行することに対して、新しい学問への取り組み、新しい人間関係、親元を離れ見知らぬ土地での生活など、高校生活までとは違い、様々な変化が伴い、その変化に適切に対処できるか否かが、大学移行後の生活に大きな影響を与えると指摘されている（山本・ワップナー、1992）。

学校適応に影響を及ぼす要因として、「対人関係」と「学業」の2側面に大別されると言われている（広沢、2007）。また青年期後期にあたる大学生の重要な対人関係は、「友人」と「恋愛」と言われている（多川・吉田、2002）。その中でも友人関係は学校適応や心理的適応との関連が強いと指摘されている（大久保、2005）。これらより、友人関係を良好に保つことは、小学生・中学生・高校生だけでなく、大学生にとっても、大学生活を有意義に過ごすための重要な要素の1つであると考えられる。特に、大学新入生は新しい学校での生活で、不安やストレスを抱えていると考えられ、その中で友人を作る、その友人との関係を維持していくという行動は重要である。藤塚・藤原・石田・米谷・木村（2002）は、大学新入生を対象に入学後3ヶ月間における生活習慣について検討した結果、大学入学直後の健康状態は心身ともに不安定であると述べている。これらのことを考慮すると、大学新入生の学校移行期においても、友人関係の変化について検討する必要があると思われる。

これまでに、大学生の友人関係に関する尺度が数多く作成され、その尺度の妥当性や信頼性も検討されてきている。岡田（1995）は、青年期の友人関係の特徴は時代とともに変化すると考え、現代青年における友人関係の特徴について検討し、「気遣い」、「ふれあい回避」、「群れ」から構成される友人関係尺度を作成している。岡田（2005）は、自己決定理論の枠組みから友人関係の動機づけを測定するため、「外的」、「取り入れ」、「同一化」、「内発」から構成される尺度を作成している。藤井（2001）は、「表面的関係から踏み出せない距離のとり方」、「密着しようとする距離のとり方」、「お互いの領域を守る距離のとり方」、「相手主体で同調する距離のとり方」、「互いを尊重する柔軟な距離

のとり方」, 「互いを支配しようとする距離のとり方」から構成される友人関係の心理的距離の取り方の尺度を作成している。山中（1994）は、大学生を対象として友人関係の行動的側面を検討するために、Hays（1984, 1985）、和田・廣岡・林（1986）、中村（1989）の研究を参考に友人関係に関する行動チェックリストを開発している。このように大学生、青年期を対象とした尺度は作成されているが、これまでに大学新入生の友人関係に焦点をあてた尺度は開発されていない。そこで、第一に、大学新入生が友人関係を形成・維持する行動に焦点をあてた尺度を作成することを目的とする。また、作成した尺度の妥当性と信頼性を検討する。

青年期の友人関係の発達の变化についての研究も、これまでに数多く行われてきている。例えば、落合・佐藤（1996）は中学生・高校生・大学生を対象として、青年期における友達とのつきあい方の発達の变化について検討し、中学生においては、「広く浅くかかわるつきあい方」が多くみられたが、高校生になると「深く広くかかわるつきあい方」が多くなり、大学生になると「深く狭くかかわるつきあい方」が多くなると述べている。また、榎本（1999）は中学生・高校生・大学生を対象として、青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化について検討し、活動的側面における発達の变化として、男子は友人と遊ぶ関係の「共有活動」からお互いを尊重する「相互理解活動」へと変化し、女子は、友人との類似性に重点をおいた「親密確認活動」から、他者を入れない絆をもつ「閉鎖的活動」へと変化し、その後「相互理解活動」へと変化していくと述べている。これらの研究は、中学生、高校生、大学生の友人関係の発達の变化を検討しており、大学新入生の友人関係の形成や維持については検討していない。そこで、大学新入生を対象に、短期間の友人関係の変化について検討する。

これまでに、友人関係は適応感と密接な関係があると報告されている。岡田（2005）は、友人関係の動機づけと向社会的行動との関連について検討している。その結果、友人に対して自己決定的な動機づけをもっている人ほど、向社会的行動を多く行う傾向があること、友人関係への動機づけが向社会的行動に及ぼす影響は性差によって異なり、女性よりも男性の方が強いことを報告して

いる。吉岡（2001）は、友人関係を形成する上での理想と友人関係を形成した際の現実のズレと友人関係満足感、及び自己受容との関連について検討している。その結果、友人関係の理想と現実のズレが大きいくほど、友人関係の満足感は低くなり、自己受容が高いほど、友人関係の満足感が高くなる。また友人関係の理想と現実のズレの差が大きくても、自己受容が高ければ友人関係満足感は高くなると述べている。加藤（2001）は、対人ストレスモデルと友人関係満足感との関連について検討している。その結果、対人ストレスコーピングには不安などのネガティブ関係のコーピングと QOL などのポジティブコーピングの 2 側面が存在し、ポジティブ関係コーピングは友人関係満足感に正の影響を与えている。一方、ネガティブ関係コーピングは友人関係に関する主観的満足感に対して負の影響を与えていると述べている。これらの研究は友人関係と適応感との関連を検討しているが、友人関係の変化と適応感との関連については検討していない。大学新入生の新しい学問への取り組み、新しい人間関係、親元を離れ見知らぬ土地での生活などを考えると、友人関係は不安定で、変化することが推察される。これらより、本研究では、大学新入生の友人関係を形成・維持する行動の変化と大学生生活の適応感との関連について検討する。

以上の問題意識より、本研究では、第 1 に、大学新入生の友人関係を形成・維持する行動尺度を作成し、妥当性と信頼性を検討する。第 2 に、作成した友人関係を形成・維持する行動尺度を用いて短期間の縦断的な調査を実施し、大学新入生の友人関係の変化について検討する。第 3 に、大学新入生の友人関係を形成・維持する行動の変化が大学生生活の適応感の変化を予測するのか検討する。

【予備調査】

1. 調査対象者：大学生 19 名（男子 9 名、女子 10 名）
2. 調査時期：2015 年 2 月中旬
3. 自由記述内容：「大学入学時、新しい友人をつくるためにどのような働きかけや行動をしましたか。」「友人関係を維持していくために、どのようなことを心がけていますか。」と問いに対して、自由記述で回答した。

得られた記述回答を心理学者 1 名と心理学を専攻する大学院生 1 名で議論

し、KJ法を用いて分類した。その結果、26項目が採用され、「友人関係を形成・維持する行動尺度」を作成した。

【方法】

1. 調査対象者：大学1校と短期大学1校の新入生を対象に質問紙調査を実施した。1回目626名（男子314名，女子312名），2回目567名（男子269名，女子298名）であった。1回目と2回目の両方を回答した567名を分析対象とした。

2. 調査時期：1回目；2015年4月中旬（以下Time1），2回目；2015年7月中旬（以下Time2）

3. 調査手続き

授業時に受講生に質問紙を配布し，回収した。

4. 調査内容

- ① 基本的属性：学生番号・性別・居住・進路希望を尋ねた。
- ② 友人関係の形成・維持する行動尺度：予備調査で作成した友人関係の形成・維持する行動尺度の26項目を「1全く行っていない」～「6とても行っている」の6段階評定（1点～6点）で回答を求めた。
- ③ 自尊感情尺度：Rosenbergが作成した自尊感情尺度の10項目の邦訳したもの（山本・松井・山成，1982）を用いた。「1あてはまらない」～「5あてはまる」の5段階評定（1点～5点）で回答を求めた。
- ④ 友人関係尺度：友人関係満足感を測定する8項目（豊田，2004）と，友人との深い付き合い方の4項目（落合・佐藤，2000）を「1全くあてはまらない」～「5とてもあてはまる」の5段階評定（1点～5点）で回答を求めた。
- ⑤ 大学生生活適応感尺度：大学生生活適応感尺度（渡辺，2014）の21項目を「1全くあてはまらない」～「7とてもあてはまる」の7段階評定（1点～7点）で回答を求めた。大学生生活適応感尺度の下位尺度は「大学生生活に関する満足感」10項目，「大学生生活に関する抑うつ感」5項目，「学習に対する適応感」3項目，「対人関係の満足感」3項目である。

ただし、「大学生活に関する抑うつ感」の得点は、得点が高いと抑うつ感が低いことを示す。

【結 果】

1. 友人関係を形成・維持する行動尺度の因子分析

予備調査で作成した友人関係を形成・維持する行動尺度 26 項目に対して、最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況、解釈の可能性から 3 因子構造が妥当であると判断した。次に、3 因子構造の最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が .40 以下であった 6 項目を分析対象から除外し、残りの項目について最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンを Table1 に示す。第 1 因子は 8 項目で構成されており、「世間話でも友人の話をしっかり聞く」、「友人の言動に共感する」などの親密や信頼に関する項目から「友人関係親密維持」と命名した。第 2 因子は、7 項目で構成されており、「悩み事な

Table1 友人関係を形成・維持する行動の因子構造

| | I | II | III | 共通性 |
|---|------|------|------|-----|
| I 友人関係親密維持 $\alpha=.86$ | | | | |
| 22. 世間話でも友人の話をしっかりと聞く | .82 | -.14 | .08 | .63 |
| 23. 友人の言動に共感する | .68 | .04 | .12 | .62 |
| 26. 友人によって接し方を変えない | .65 | -.04 | -.12 | .29 |
| 24. 約束事を守る | .64 | -.10 | .17 | .48 |
| 25. 本音で話す | .60 | -.19 | -.09 | .46 |
| 19. 友人を信頼する | .59 | .26 | -.06 | .55 |
| 21. 友人との適度な距離を保つ | .56 | -.05 | .10 | .37 |
| 20. 友人の言動に合わず | .48 | .11 | .02 | .34 |
| II 友人関係維持 $\alpha=.86$ | | | | |
| 18. 悩み事などの相談をする | -.08 | .93 | -.12 | .66 |
| 17. 悩み事などの相談にのる | .04 | .81 | -.01 | .69 |
| 11. 一緒に遊びに行く | -.03 | .63 | .06 | .42 |
| 10. 授業や課題を一緒にする | -.03 | .50 | .13 | .33 |
| 14. 自分のことを友人に知ってもらう | .15 | .47 | .20 | .54 |
| 16. 友人の気持ちや考え方を知ろうとする | .35 | .45 | .02 | .57 |
| 13. SNSでコミュニケーションをとろうとする | .02 | .42 | .19 | .33 |
| III 友人関係形成 $\alpha=.89$ | | | | |
| 4. 明るく接する | -.06 | -.02 | .95 | .81 |
| 6. 元気な姿で接する | -.03 | .05 | .88 | .78 |
| 9. 笑顔で会話をする | .11 | .01 | .73 | .67 |
| 5. 親切に接する | .14 | -.03 | .72 | .65 |
| 1. 積極的に話しかける | -.13 | .34 | .47 | .41 |
| | I | - | | |
| | II | .69 | - | |
| | III | .71 | .64 | - |

どの相談をする」,「悩み事などの相談に乗る」などの自己開示や同調行動に関する項目から「友人関係維持」因子と命名した。第3因子は5項目で構成されており,「明るく接する」,「元気な姿で接する」などの友人を形成するにあたり,初期の行動面に関する項目から「友人関係形成」因子と命名した。各因子の平均値 (SD) と信頼性係数は,「友人関係親密維持」因子は 4.69 (.71), $\alpha = .86$, 「友人関係維持」因子は 4.11 (.98), $\alpha = .86$, 「友人関係形成」因子は 4.69 (.85), $\alpha = .89$ であった。

次に友人関係を形成・維持する行動尺度の確認的因子分析を行った。その結果, 適合度は, GFI= .87, AGFI= .84, CFI= .91, RMSEA= .08 であった。

2. その他の尺度の平均値 (SD) と信頼性係数 (α 係数)

その他の尺度の項目の平均値(SD)は以下の通りである。自尊感情尺度は3.00 (.67), $\alpha = .82$, 大学生生活適応感尺度の「大学生生活に関する満足感」は 4.76 (1.04), $\alpha = .93$, 「大学生生活に関する抑うつ感」は 5.20 (1.08), $\alpha = .81$, 「学習に対する適応感」は 5.50 (.98), $\alpha = .59$, 「対人関係の満足感」は 5.07 (1.31), $\alpha = .74$, 友人関係尺度の「友人関係満足感」は 3.90 (.73), $\alpha = .86$, 「友人との深い付き合い」は 3.60 (.84), $\alpha = .78$ であった。

3. 友人関係を形成・維持する行動尺度の構成概念妥当性の検討

友人関係を形成・維持する行動尺度の下位尺度である「友人関係形成」, 「友人関係維持」, 「友人関係親密維持」の構成概念妥当性を検討するために, 友人関係尺度の「友人との深い付き合い」と「友人関係満足感」とのピアソンの積率相関係数を算出した (Table2)。その結果, 「友人関係形成」, 「友人関係維持」, 「友人関係親密維持」と「友人との深い付き合い」と「友人関係満足感」との

Table2 友人関係を形成・維持する行動と友人との深い付き合い, 満足との相関関係

| | 友人との 深い付き合い | 友人関係 満足感 |
|----------|----------------|-------------|
| 友人関係形成 | .36*** | .34*** |
| 友人関係維持 | .39*** | .32*** |
| 友人関係親密維持 | .51*** | .46*** |

***: $p < .001$

間にすべて有意な正の相関関係がみられた。「友人との深い付き合い」においては「友人関係形成」との間では弱い正の相関関係が、「友人関係維持」、「友人関係親密維持」との間では中程度の正の相関関係がみられた。「友人関係満足感」において、「友人関係形成」、「友人関係維持」の間では弱い正の相関関係が、「友人関係親密維持」との間では中程度の正の相関関係がみられた。

4. 友人関係を形成・維持する行動尺度の Time1 と Time2 の比較

友人関係を形成・維持する行動尺度の下位尺度の変化を検討するために Time1 と Time2 の各得点を比較した (Table3)。その結果、「友人関係維持」においては、Time1 より Time2 の得点の方が有意に高かった ($t=3.78$, $p<.001$)。「友人関係形成」と「友人関係親密維持」においては、Time1 と Time2 の 2 時点の有意な得点差はみられなかった。

Table3 友人関係を形成・維持する行動尺度のTime1とTime2の比較

| | Time1 | Time2 | t値 |
|----------|-------|-------|-----------|
| 友人関係形成 | 4.69 | 4.63 | 1.78 n.s. |
| SD | .85 | .81 | |
| 友人関係維持 | 4.11 | 4.24 | 3.78 *** |
| SD | .98 | .92 | |
| 友人関係親密維持 | 4.69 | 4.64 | 1.80 n.s. |
| SD | .71 | .69 | |

***: $p<.001$

5. 友人関係を形成・維持する行動と適応感との関連

Time1 と Time2 の友人関係を形成・維持する行動と適応感との関連を検討するために、ピアソンの積率相関係数を求めた (Table4, Table5)。その結果、Time1 と Time2 とともに、「友人関係形成」、「友人関係維持」、「友人関係親密維持」と「大学生活に関する満足感」、「大学生活に関する抑うつ感」、「学習に対する適応感」、「対人関係の満足感」、「自尊感情」との間には、有意な正の相関関係が認められた。

次に、友人関係を形成・維持する行動の変化 (Time1, Time2) が、大学生活適応感と自尊感情の変化をどの程度予測するのか検討するために、友人関係を形成・維持する行動尺度の下位尺度「友人関係形成」、「友人関係維持」、「友人関係親密維持」の差得点を独立変数とし、「大学生活に関する満足感」、

「大学生活に関する抑うつ感」, 「学習に対する適応感」, 「対人関係の満足感」, 「自尊感情」の差得点を従属変数とした強制投入法による重回帰分析を行った (Table6)。その結果, 「友人関係形成」については, 「大学生活に関する満足感」, 「大学生活に関する抑うつ感」, 「学習に対する適応感」, 「自尊感情」に対する正の標準偏回帰係数が有意であった。「友人関係維持」については, 「大学生活に関する満足感」, 「対人関係の満足感」が正の標準偏回帰係数が有意であった。「友人関係親密維持」については, 「大学生活に関する満足感」, 「対人関係の満足感」に対する正の標準偏回帰係数が有意であった。

Table4 友人関係を形成・維持する行動と適応感との相関関係(Time1)

| | 大学生活に関する | 大学生活に関する | 学習に対する | 対人関係の | |
|----------|----------|----------|--------|--------|--------|
| | 満足感 | 抑うつ感 | 適応感 | 満足感 | 自尊感情 |
| 友人関係形成 | .47*** | .32*** | .33*** | .48*** | .27*** |
| 友人関係維持 | .48*** | .25*** | .27*** | .58*** | .18*** |
| 友人関係親密維持 | .49*** | .31*** | .38*** | .51*** | .19*** |

***: $p < .001$

Table5 友人関係を形成・維持する行動と適応感との相関関係(Time2)

| | 大学生活に関する | 大学生活に関する | 学習に対する | 対人関係の | |
|----------|----------|----------|--------|--------|--------|
| | 満足感 | 抑うつ感 | 適応感 | 満足感 | 自尊感情 |
| 友人関係形成 | .47*** | .30*** | .37*** | .54*** | .26*** |
| 友人関係維持 | .43*** | .18*** | .26*** | .61*** | .12** |
| 友人関係親密維持 | .38*** | .24*** | .26*** | .51*** | .16*** |

***: $p < .001$, **: $p < .01$

Table6 友人関係を形成・維持する行動の変化が適応感の変化に及ぼす影響

| | 大学生活に関する | 大学生活に関する | 学習に対する | 対人関係の | |
|----------|----------|----------|---------|---------|---------|
| | 満足感 | 抑うつ感 | 適応感 | 満足感 | 自尊感情 |
| | β | β | β | β | β |
| 友人関係形成 | .13** | .20*** | .20*** | .07 | .16*** |
| 友人関係維持 | .13** | -.01 | -.01 | .14*** | .03 |
| 友人関係親密維持 | .20*** | .00 | .07 | .17*** | .05 |
| R^2 | .13*** | .04*** | .06*** | .10*** | .04*** |

***: $p < .001$, **: $p < .01$

【考察】

1. 友人関係を形成・維持する行動尺度の因子分析

大学新入生を対象に, 友人関係を形成・維持する行動尺度を因子分析した結果, 3 因子が得られた。第1 因子は「世間話でも友人の話をしっかり聞く」, 「友人の言動に共感する」など8 項目から構成されている。これらの項目は, 友人関係の親密性や信頼性に関する項目内容である。「本音で話す」の項目に関しては, 第2 因子の「悩み事などを相談する」などの項目より深い自己開示であ

ると考えられる。悩み事を相談することも友人に対する信頼性が高いからと考えられるが、その悩み事も含めて、何事も友人に本音で話すことは、非常に高い信頼性を示す行動であり、親密度も深いと思われる。また、「友人の言動に共感する」の項目も同様、友人を信頼し、友人との関係が親密であるため、友人の言動に共感できるとと思われる。これらより、第1因子と第2因子の項目は類似しているが、第1因子の方が親密度が深いと考えられる。第2因子は「悩み事などを相談する」、「悩み事などの相談に乗る」など7項目から構成されている。これらの項目は、自己開示や同調行動に関する項目の内容である。「悩み事などを相談する」や「自分のことを友人に知ってもらう」などは自己開示に関する項目内容と思われる。自己開示をすることにより、友人も自己開示を返報するという自己開示の返報性により、友人関係が維持され、深まっていくと思われる。また「一緒に遊びに行く」や「授業や課題を一緒にする」などの項目は同調行動と思われる。友人と行動を共にすることにより、自己開示や他者への共感が深まると考えられる。第3因子は「明るく接する」、「元気な姿で接する」など5項目から構成されている。これらの項目は、ポジティブな行動をすることによって、友人が良い印象を形成するというような項目の内容である。友人関係を形成する際は「話しかける」や「接する」などの行動をとり、さらに「笑顔」や「明るく」などの相手に良い印象を与えるような非言語的表出がなされる。高木（2006）は、友人関係形成時の行動として、「積極的行動（自ら話しかけるなど）」、「消極的行動（話しかけられるのを待つなど）」、「非言語的表出（笑顔でいるなど）」の種類の行動が存在することを述べている。また、山本（2000）は対人関係の初期段階において、容貌や衣服の外見は相手に与える影響は大きいと指摘している。このことから、友人関係形成初期においては、積極的な言語的表出行動や非言語的表出、相手に良い印象を与えるような外見を整えるというような項目になったと考えられる。

2. 友人関係を形成・維持する行動尺度の構成概念妥当性の検討

友人関係を形成・維持する行動尺度の下位尺度である「友人関係形成」、「友人関係維持」、「友人関係親密維持」の構成概念妥当性を検討するために、友人

関係尺度の「友人との深い付き合い」と「友人関係満足感」とのピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、「友人関係形成」、「友人関係維持」、「友人関係親密維持」と「友人との深い付き合い」と「友人関係満足感」との間にすべて有意な正の相関関係がみられた。「友人との深い付き合い」との関連においては、友人関係が「形成」、「維持」、「親密維持」と変化するにつれて相関係数が上昇しており、友人関係が深くなっていくことが明らかにされた。友人関係の形成初期は表面的な付き合いであるが、維持過程で自己開示や同調行動により関係が深くなると考えられる。また、親密維持においては、維持過程よりも深い自己開示や共感により、信頼関係が形成されるため、「友人関係形成」、「友人関係維持」よりも友人との付き合いが深くなると思われる。

「友人関係満足感」においては、「友人関係形成」、「友人関係維持」の間で弱い正の相関関係、「友人関係親密維持」との間に中程度の正の相関関係がみられた。友人関係が形成され、維持され、さらに友人関係が深まっていくにつれて、友人関係の満足感が高くなることが明らかにされた。親密な友人関係を維持する際に、友人と本音で話すこと、友人の言動に共感することで、他人には話すことができない内容を打ち明け、共有することができるため満足度がより高くなったと推察される。

これらの研究結果から、友人関係を形成・維持する行動尺度の構成概念妥当性が示されたといえよう。また「友人関係親密維持」においては、「友人との深い付き合い」、「友人関係満足感」ともに中程度の正の相関関係が示された。これらより、大学新入生にとって親密な友人関係を維持することは、友人関係の満足感を得るための重要な要素と推察される。

3. 友人関係を形成・維持する行動の変化

友人関係を形成・維持する行動尺度下位尺度の変化を検討するために Time1 と Time2 の各得点を比較した。その結果、「友人関係維持」について、Time1 より Time2 の方が有意に高くなった。これは、大学入学時より入学3ヶ月後のほうが友人との同調行動や自己開示を行う頻度が多くなったためであると思われる。濱名（2004）は、大学では入学2ヶ月後の6月までには、学業

面での付き合いも含めた友人関係が形成されると報告している。上記の報告も思慮すると、大学入学3ヶ月後には、授業を共に受講し、悩み事を相談し合える関係が築かれていると考えられる。

また、Time1での「友人関係形成」と「友人関係親密維持」の平均値が4.69、「友人関係維持」の平均値は4.11、Time2での「友人関係形成」の平均値は4.63、「友人関係維持」の平均値は4.24、「友人関係親密維持」の平均値が4.64であった。Time1とTime2の友人関係親密維持の平均値はもっと低い得点と考えられたが、友人関係形成と同程度の得点であった。これは、大学新入生が4月の時点から友人に対して「世間話でも友人の話をしっかりと聞く」、「友人の話に共感する」などの行動をとっていると考えられ、4月の時点から友人関係は親密度があったと推察される。これは、同じ高校出身や推薦入試などで早くから大学入学が決定しており、入学するまでに友人関係が形成されていた可能性も考えられるため、どのような型式の入試を経てきたか調査することも必要だろう。

4. 友人関係を形成・維持する行動と適応感との関連

Time1とTime2の友人関係を形成・維持する行動下位尺度「友人関係形成」、「友人関係維持」、「友人関係親密維持」と「大学生生活に関する満足感」、「大学生生活に関する抑うつ感」、「学習に対する適応」、「対人関係の満足感」、「自尊感情」との関連を検討した結果、すべてにおいて、有意な正の相関関係が認められた。大学新入生にとって、大学生生活を適応的に、また有意義に過ごすためには、友人関係を形成したり、維持したりする行動が必要であることが示唆された。大学新入生は新しい生活、新しい学問など不安や心配が多いと言われており（山本・ワップナー、1992）、友人がその不安や心配をサポートする要因の一つになると考えられる。

次に、友人関係を形成・維持する行動の変化が適応感の変化をどの程度予測するか検討するために、友人関係を形成・維持する行動尺度の下位尺度の差得点を独立変数、「大学生生活に関する満足感」、「大学生生活に関する抑うつ感」、「学習に対する適応」、「対人関係の満足感」、「自尊感情」の差得点を従属変数とし

た強制投入法による重回帰分析を行った。「大学生生活に関する満足感」に関しては「友人関係形成」、「友人関係維持」、「友人関係親密維持」のすべての項目において正の標準偏回帰係数が有意であった。友人関係を形成することで、周囲に溶け込め自分の居場所を確立すること、また大学での悩み事の相談や秘密を共有できる友人の存在が大学生生活の満足感に影響を与えていると思われる。良好な友人関係を形成・維持していくことが大学生生活の満足度を高めることが示唆された。

「大学生生活に関する抑うつ感」、「学習に対する適応感」、「自尊感情」においては、「友人関係形成」のみ正の標準偏回帰係数が有意であった。良好な友人関係が形成されていることが、大学での不安や孤独感、抑うつ感を軽減させ、学習意欲や勤勉さを向上させ、自尊感情を向上させると考えられる。藤原・河村（2015）が友人関係の形成意欲と学習意欲との間には正の関連があると述べていること、小塩（1998）は友人関係が良好なほど自尊感情が高いと指摘しており、類似した結果と思われる。

「対人関係の満足感」については、「友人関係維持」、「友人関係親密維持」は正の標準偏回帰係数が有意であった。青年期は親から心理的離乳を果たす時期であり、児童期から青年期にかけて、親より友人が重要な存在となる。心の不安定な青年期において、悩み事や本音を話し合える友人の存在、同調行動や共感し合える友人の存在は、青年期の様々な悩みや問題を共に解決してくれる重要な存在であり、心の拠り所となるため、対人関係の満足感を高めているのではないかと推察される。

【まとめと今後の課題】

本研究では、友人関係を形成・維持する行動尺度を作成し、妥当性を検討した。また友人関係を形成・維持する行動の変化、大学生生活の適応感との関連について検討した。その結果、「友人関係形成」、「友人関係維持」、「友人関係親密維持」の3因子が抽出され、妥当性が明らかにされた。また、友人関係を形成・維持する行動の変化については、「友人関係維持」がTime1よりTime2の得点の方が有意に高かった。さらに、Time1とTime2ともに、友人関係を形成・維

持する行動と大学生活の適応感の間で有意な正の相関関係がみられた。友人関係を形成・維持する行動の変化がどの程度大学生活の適応感の変化を予測するのか検討し、「友人関係形成」の変化は、「大学生活に関する満足感」,「大学生活に関する抑うつ感」,「学習に対する適応感」,「自尊感情」の変化を,「友人関係維持」と「友人関係親密維持」の変化は,「大学生活に関する満足感」,「対人関係の満足感」の変化を予測した。

最後に今後の課題について述べる。本研究では,Time1(4月)とTime2(7月)の縦断調査を実施し,友人関係を形成・維持する行動の変化に焦点をあてて調査を行ったが,大学新入生の友人関係の変化は約3か月で測定できるものではない。その後も友人関係は変化していると思われるため,継続的な縦断調査が必要と思われる。また,学生により友人関係の変化は相違が考えられるため,面接調査を用いて個々の相違を詳細に検討する必要があるだろう。

【引用文献】

- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の
変化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 藤井恭子 2001 大学生の友人関係における心理的距離の取り方 茨城県立
医療大学紀要,6, 69-78
- 藤塚千秋・藤原有子・石田博也・米谷正造・木村一彦 2002 大学新入生の
生活習慣に関する研究－入学後3ヶ月における実態調査からの検討－ 川
崎医療福祉学会誌, Vol.12No.2, 321-330.
- 藤原和政・河村茂雄 2015 高校生における学校適応と友人関係意欲, 学習
意欲との関連 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊, 22号2.
- 濱名篤 2004 私立高等教育研究所 アルカディア学報.
- Hays,R.B. 1984 The development and maintenance of friendship. *Journal of
Social and Personal Relationships*,1,75-97.
- Hays,R.B. 1985 A longitudinal study of friendship development. *Journal of
Personality and Social Psychology*,48,909-924.

- 広沢俊宗 2007 大学新入生の適応に関する研究（Ⅰ）－学習面での適応－
不適応にかかわる諸変数の検討－ 関西国際大学研究紀要, 8, 121-138.
- 加藤司 2001 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 中村雅彦 1989 大学生の友人関係の発展過程に関する研究（Ⅰ）－関係性の
初期差異化現象に関する検討－ 日本グループ・ダイナミックス学会第 37
回大会発表論文集, 65-66.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達の變
化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 落合良行・佐藤有耕 2000 5年生の友達関係 小五教育技術 5月号, 51-57.
- 岡田涼 2005 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検
討－自己決定理論の枠組みから パーソナリティ研究, 14（1）, 101-112.
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育
心理学研究, 43（4）, 354-363.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因－青年用適応感尺
度の作成と学校別の検討－ 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連
教育心理学研究, 46, 280-290.
- 高下梓 2011 大学新入生の適応感の変化－4月から7月にかけての初期適
応過程－ 明星大学心理学年報, No.29, 9-19.
- 多川則子・吉田俊和 2002 親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響－青
年期の恋愛関係と友人関係－ 対人社会心理学研究, 2, 65-73.
- 豊田瀬理乃 2004 対人関係上の信念の変化からみた友人関係の分析 平成
15年度筑波大学人間学類卒業論文（未公刊）.
- 和田実・廣岡秀一・林文俊 1986 大学生の交友関係の進展に関する研究（Ⅰ）
日本社会心理学会第 27 回・日本グループ・ダイナミックス学会第 34 回合
同大会発表論文集, 73-74.
- 渡辺舞 2014 大学生の友人関係は変化するのか？－大学4年間の追跡的検
討による大学適応感との関連について－ 北星学園大学大学院社会福祉学
研究科 北星学園大学大学院論集第 5 号（通巻第 17 号）.

大学新入生の友人関係の変化と適応感との関連（渡邊・堤）

- 山本真理子 2000 顔の印象と对人的影響 日本化粧品技術者会誌, 34 (4), 351-358.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山本多喜司・シーモアワップナー 1992 人生移行の発達心理学 北大路書房.
- 山中一英 1994 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, 34 (2), 105-115.
- 吉岡和子 2001 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30.

付記

本論文は第2著者が皇學館大学大学院教育学研究科に提出した修士論文を加筆・修正したものです。本研究に協力してくださいました大学生のみなさまに深く感謝申し上げます。

The Relationship between Changes in Friendship and Psychological
Adjustment in University Freshmen

– A Longitudinal Investigation in a Short Period –

Kenji WATANABE, Education Department, Kogakkan University
Takayuki TSUTSUMI, Isobe Elementary School in Shima City

Abstract

The purpose of this study was to make a scale for the formation and maintenance of friendship, investigate the validity of the scale and the relationship between changes in friendship between April (Time 1) and July (Time 2) and psychological adjustment in university freshmen. To make the scale, 19 university students wrote essays and these were analyzed using the KJ method. As a result, a 26-item scale for the formation and maintenance of friendship was developed.

Then, a questionnaire of the 26 chosen items was answered by 567 university freshmen. Factor analysis produced 3 subscales: a eight-item group for close maintenance of friendship, a seven-item one for the maintenance of friendship, and a five-item one for the formation of friendships. Also the validity in this scale was proved. The maintenance of friendship showed a higher Time 2 point than Time 1. The change in the formation of friendship predicted the change of a feeling of satisfaction about university life, a feeling of depression about university life, adaptive feeling about learning, and self-esteem. The change in the maintenance of friendship and the close maintenance of friendship predicted the change in a feeling of satisfaction about university life and a feeling of satisfaction about relationships with other people.

Keywords : friendship, change, university freshmen, psychological adjustment, longitudinal investigation

